**ドイツ語における他動性と使役・受動**

**藤縄 康弘**

伝統的ドイツ語学の見方によれば、他動詞は、対格目的語を支配する動詞に限られる。たとえ主語のほかに目的語を求める動詞であっても、その目的語を対格以外の格（与格、属格）や前置詞句のかたちで支配する動詞は、他動詞とは見なされず、目的語をまったく要求しない動詞ともども自動詞に分類される。このような分類を行うひとつの利点は、人称受動文が他動詞からのみ形成されるのに対し、自動詞からは非人称受動文しか形成され得ない、という一般化を可能にすることである。

しかし、目的語をどのような格的範疇で支配するかは、動詞の語彙論的な性質である。そうである以上、使役や受動といった態の操作において、いくら対格の振舞いが顕著だとしても、その点に即、統語論的な他動性を認めるわけには行かない。統語論的な問題としての他動性は、まさに対格支配を超えたところに見出されなければならない。本発表では、こうした問題意識に立ち、ドイツ語の態を概観する。取り上げる話題は以下の3つである。

**1. 反使役**　ドイツ語には反使役の表現形式が2種類ある。再帰代名詞を伴った構文とこれを伴わない、単純な自動詞の構文である。どちらの構文を用いるかは、語彙的に決まっているが、いずれを用いるにせよ、「動作主の介入なしで状態変化が起こる」という骨格的意味は共通である。しかし両者には、自由な与格の解釈をめぐって大きな相違がある。再帰構文による表現では、与格は単に影響を被る人物としか解釈されないのに対し、自動詞構文には「うっかり～してしまう」という非意図的使役の解釈も可能である。この後者の、他動性の高い解釈は、動詞の語彙意味論と密接に関連しつつ、これを超えた次元で動機づけられる。

**2. werden受動とlassen使役**　上述のとおり、werden受動は、自動詞に適用されると非人称受動を形成するが、非人称受動そのものは、対格を支配しないという意味での自動詞だけでなく、対格を支配する他動詞からも条件次第で形成可能である。他方、lassen使役では、もとの動作主を対格で表示する可能性に加え、受動文での動作主表示であるvonやdurchによる前置詞句もあり得る。その際、この表示は、主に対格を支配する他動詞に見られるほか、対格を支配しないという意味での自動詞の一部でも認められる。また、対格目的語と与格目的語を伴う二重他動詞では、vonやdurchによる動作主表示のみが可能である。つまり、werden受動における対格支配の無効化とlassen使役における対格支配の追加は表裏一体の関係にあり、いずれも、語彙的な対格支配の有無を基準とする他動性・非他動性には還元されない性質である。

**3. bekommen + 過去分詞の多義性**　werden受動が対格目的語を主語とするのに対し、与格目的語を主語とするには「be­kommen（本動詞としては「もらう」の意味）＋過去分詞」構文を用いる。この構文は、伝統的には受動態と見なされてこなかったが、こうした認識の背後には格の問題のほか、別の事情も潜んでいる。この構文は、「～してもらう」という受動的解釈に加え、条件次第で「成功する、できる」という法的解釈も許す。この後者の解釈は、主語が単に動作主的であるという意味で他動性が高いだけでなく、1. で触れた非意図的使役との対比で言うと、所期の結果の達成、つまり意図的使役でもある。しかもこの解釈は、基底動詞の再帰可能性によっても条件づけられており、この点でも1. と比較可能である。

全体として、ドイツ語においても、態の体系に見られる他動性は、動詞の語彙的性質としての対格支配を超えたところに認めることができる。その際、特筆すべきこととして、高い他動性にはしばしば顕在的・潜在的なかたちで与格が関与していることが指摘されるのである。